

基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	基礎科学		担当教員	大橋 敦子	
開講時期	2年次前期		総時限数	16時限	授業形態	講義	単位数 2単位

■ 科目内容

人体の運動機能を支える神経や筋、心臓や肺、消化器機能の生理学的機構を知ることは、効果的で安全な鍼灸治療を実施したり、新しい治療方法を開発する上で重要である。本科目では実験実習とそれによって得られたデータに関する解釈を通じ、科学的な思考の学習することを目的とする。

■ 到達目標

- ・測定機器の原理、測定方法、値の意味を説明することができる。
- ・実験により得られたデータから客観的・論理的に考察することができる。

■ 授業方法・教材

- ・教員が作成した資料を基に行う。
- ・参考図書「生理学実習NAVI 第2版（医歯薬出版株式会社）」図書室にあるので読んでおくこと

■ 評価基準

- ・授業毎に提出するレポートにより評価する。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			実習① 循環の調節 体位変換と心拍血圧、運動負荷と心拍血圧、冷却刺激と心拍血圧 心臓の自律神経調節機構（さまざまな反射機構など）
2			
3			
4			
5			実習② 平衡の調節 開眼・閉眼時の重心動揺の変化、片足起立時の重心動揺の変化
6			
7			
8			実習③ 代謝（特に血糖値）の調節 食後血糖値の経時測定、運動負荷による血糖値の変化 内分泌について
9			
10			
11			
12			実習④ 運動の調節 腱反射と誘発筋電図、運動神経伝導速度 伸張反射・誘発筋電図、神経伝導速度について
13			
14			
15			
16			

専門基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	人体機能学		担当教員	工藤 匡	
開講時期	2年次前期		総時限数	30時限	授業形態	実技	単位数 4単位

■ 科目内容

1年次に履修した解剖学Ⅰ・解剖学Ⅱの内容に基づき、局所解剖的な人体の構造・機能や運動学について学習する。

■ 到達目標

- ・中枢神経系および末梢神経系について説明できる。
- ・視覚器や聴覚器について説明できる。
- ・局所的な運動器の構造・機能・運動学について説明ができる。
- ・脳神経系に支配される運動器の構造・機能・運動学について説明ができる。

■ 授業方法・教材

- ・教員が配布する資料
- ・解剖学の教科書：「解剖学（第2版）（公社）東洋療法学校協会編 医歯薬出版（株）」

■ 学習方法

主に座学形式で学習する。必要に応じて学生同士で筋運動の確認や触診などを行う。

■ 評価基準

中間試験・期末試験の成績で評価する。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			中枢神経系①
2			中枢神経系②
3			中枢神経系③
4			中枢神経系④
5			中枢神経系⑤
6			末梢神経系①
7			末梢神経系②
8			末梢神経系③
9			感覚器系①
10			感覚器系②
11			感覚器系③
12			頭部・顔面部の筋
13			頸部の筋
14			胸部・腹部の筋
15			呼吸筋
16			背部・腰部の筋
17			肩甲骨周辺の筋
18			肩の筋①
19			肩の筋②
20			前腕の筋①
21			前腕の筋②
22			手の筋
23			骨盤帯の筋
24			殿部の筋
25			大腿部の筋①
26			大腿部の筋②
27			下腿の筋①
28			下腿の筋②
29			足部の筋
30			まとめ

専門基礎分野

部	昼間部	科目名	病理学概論		担当教員	細川眞澄男	
開講時期	2年次通年		総時限数	24時限	授業形態	講義	単位数 3単位

■ 科目内容

病気の本態を理解するために、体全体に共通してみられる基本的病変を、その原因とともに学習し、それにより起こる身体の変化について学ぶ。

■ 到達目標

1. 病理学とはなにかを説明できる。
2. 病変の単位である細胞・組織の成り立ちを説明できる。
3. 循環障害、代謝異常、炎症と免疫異常などによる病変を説明できる。
4. 「がん」について概説できる。
5. 疾病と年齢との関連について説明できる。
6. 各臓器の疾病の特徴を説明できる。

■ 授業方法・教材

- ・教科書：「病理学概論」（東洋療法学校協会編、医歯薬出版）を読み合わせし、中村仁志夫ほか著「医療系学生のための病理学」および渡辺 照男編「カラーで学べる病理学」を参考に講師が用意した配布資料を使用する。

■ 学習方法

授業に出席し、授業の中で学習会得する。

■ 成績評価

期末試験の成績に授業への出席、発言なども加味して総合的に評価する。

■ 連絡事項

病理学は解剖学、生理学など学習で習得した正常な人の構造や働きの知識を基にしているので、解剖学や生理学の知識を復習しておくこと、また、授業で話せることは限界があるので、教科書や参考書を使って予習と復習をしておくことを勧める。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			はじめに 病理学序論、病理学とは 疾病についての考え方
2			総論 1. 病因論 先天性疾患・遺伝病
3			総論 2. 物質代謝異常 循環障害
4			
5			総論 3. 退行性病変 進行性病変 修復と再生
6			
7			総論 4. 炎症と感染症 免疫と免疫異常
8			
9			総論 5. 腫瘍、総論復習問題（期末試験準備）
10			
11			各論 1. 循環器系、呼吸器系
12			
13			各論 2. 消化器系、造血器系
14			
15			各論 3. 泌尿器系
16			
17			各論 4. 男性及び女性生殖器系
18			
19			各論 5. 内分泌系、脳・神経系
20			
21			各論 6. 運動器及び軟部組織系、皮膚・感覚器系
22			
23			各論復習問題（期末試験準備）
24			

専門基礎分野

部	夜間部	科目名	病理学概論		担当教員	堀 二葉 田中伸哉		
開講時期	2年次通年		総時限数	26時限	授業形態	講義	単位数	3単位

■ 科目内容

病気の本態を理解するために、体全体に共通してみられる基本的病変を、その原因とともに学習し、そのより起こる身体の変化について学ぶ。

■ 到達目標

1. 疾患は内因と外因とで生じ、いくつかの群に分類されることを理解する。
2. 細胞・組織の病変を示す用語の内容について代表的なものを把握する。
3. 疾患の発生と経過ならびに予後について、定型的なものを理解する。
4. 循環障害、代謝異常、炎症と免疫異常、腫瘍などによる病変を説明できる。
5. 医学・医療における病理学の役割について理解する。

■ 授業方法・教材

- ・教科書：「病理学概論」（東洋療法学校協会編、医歯薬出版）
- ・教員作成の講義資料を毎回配布する。

■ 学習方法

配布した講義資料を中心に授業を進める。

■ 成績評価

中間・期末試験の成績に授業への出席なども加味して総合的に評価する。

■ 連絡事項

病理学は解剖学、生理学など学習で習得した正常な人の構造や働きの知識を基にしているので、解剖学や生理学の知識を復習しておくこと、また、授業で話せることは限界があるので、教科書や参考書を使って予習と復習をしておくことを勧める。

特別講義の日程については後日連絡する。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			第1章 病理学の目的と役割 第2章 疾病についての基本的考え方
2			第3章 病因 (内因)
3			第3章 病因 (外因)
4			第4章 循環障害 (充血・うっ血、貧血・虚血)
5			第4章 循環障害 (出血、血栓症、塞栓症)
6			第4章 循環障害 (梗塞、水腫・浮腫)
7			第4章 循環障害 (脱水症、ショック)
8			第5章 退行性病変 (萎縮)
9			第5章 退行性病変 (変性)
10			第5章 退行性病変 (壊死と死)
11			第6章 進行性病変 (肥大と増殖、再生)
12			第6章 進行性病変 (化生、移植、創傷治療、組織内異物の処理)
13			第7章 炎症 (炎症の一般)
14			第7章 炎症 (炎症の分類)
15			第7章 炎症 (炎症の分類)
16			第8章 腫瘍 (腫瘍の一般)
17			第8章 腫瘍 (良性腫瘍)
18			第8章 腫瘍 (悪性腫瘍)
19			第9章 免疫異常・アレルギー (液性免疫と細胞性免疫)
20			第9章 免疫異常・アレルギー (アレルギー)
21			第9章 免疫異常・アレルギー (免疫不全、自己免疫異常)
22			第10章 先天性異常 (代謝異常、奇形)
23			第10章 先天性異常 (遺伝性疾患、染色体異常)
24			総まとめ
25			特別講義
26			〃

専門基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	臨床医学総論		担当教員	二本松 明	
開講時期	2年次通年		総時限数	46時限	授業形態	講義	単位数 6単位

■ 科目内容

はり・きゅうなどの東洋療法を実践するためには、西洋医学を基盤とする臨床医学についての全般的知識も必要である。臨床医学総論では、患者さんに対する医療面接技法や全身的及び局所的ならびに系統的な診察法を習得すると共に、臨床検査法や基本的な症候についても十分に理解し、疾患の診断や治療法を学ぶ上での基礎的な知識を学習する。

■ 到達目標

- ・ 医療面接における注意点や医療面接において確認すべき事項を説明できる。
- ・ 診察法の種類、身体診察で確認する内容について説明できる。
- ・ 生命徴候（バイタルサイン）を正しく評価し、その意義を説明できる。
- ・ 神経系の診察法と神経症状の意味を説明できる。
- ・ 運動機能の診察法と運動機能障害の意義を説明できる。
- ・ 臨床検査法の内容を理解し、検査値の意味を説明できる。

■ 授業方法・教材

- ・ 教科書：「臨床医学総論」（東洋療法学校協会編、医歯薬出版）
- ・ 教員作成の講義資料を毎回配付する。

■ 学習方法

配付した講義資料を中心に授業を進める。

■ 成績評価

中間試験（40%）、期末試験（60%）で評価する。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			第1章 診察の概要
2			第2章 診察の方法（医療面接）
3			第2章 診察の方法（視診、触診）
4			第2章 診察の方法（打診、聴診）
5			第3章 生命徴候の診察（体温、脈拍）
6			第3章 生命徴候の診察（血圧）
7			第3章 生命徴候の診察（呼吸）
8			第4章 全身の診察（顔貌・顔色、歩行、姿勢と体位）
9			第4章 全身の診察（身体計測、体型・体格、栄養状態）
10			第4章 全身の診察（皮膚・粘膜・皮下組織）
11			第4章 全身の診察（リンパ節、精神状態、言語）
12			第5章 局所の診察（頭部、顔面、眼）
13			第5章 局所の診察（鼻、耳、口腔、頸部）
14			第5章 局所の診察（胸部、乳房、肺・胸膜）
15			第5章 局所の診察（心臓）
16			第5章 局所の診察（腹部）
17			第5章 局所の診察（背部）
18			第5章 局所の診察（四肢）
19			第6章 神経系の診察（感覚検査法）
20			第6章 神経系の診察（反射検査）
21			第6章 神経系の診察（反射検査）
22			第6章 神経系の診察（脳神経系の検査）
23			第6章 神経系の診察（脳神経系の検査）
24			第6章 神経系の診察（脳神経系の検査）
25			第6章 神経系の診察（脳神経系の検査）
26			第6章 神経系の診察（脳神経系の検査）
27			第6章 神経系の診察（脳神経系の検査）
28			第6章 神経系の診察（髄膜刺激症状、高次脳機能検査）
29			第7章 運動機能検査（運動麻痺）

30		第7章 運動機能検査（筋肉の異常）
31		第7章 運動機能検査（不随意運動）
32		第7章 運動機能検査（協調運動、起立と歩行）
33		第8章 その他の診察
34		第9章 臨床検査法（一般検査）
35		第9章 臨床検査法（一般検査）
36		第9章 臨床検査法（一般検査）
37		第9章 臨床検査法（一般検査）
38		第9章 臨床検査法（一般検査）
39		第9章 臨床検査法（一般検査）
40		第9章 臨床検査法（血液生化学検査）
41		第9章 臨床検査法（血液生化学検査）
42		第9章 臨床検査法（血液生化学検査）
43		第9章 臨床検査法（生理学的検査および画像診断の概要）
44		第9章 臨床検査法（生理学的検査および画像診断の概要）
45		総まとめ
46		総まとめ

専門基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	臨床医学各論		担当教員	塩崎 郁哉	
開講時期	2年次通年		総時限数	60時限	授業形態	講義	単位数 8単位

■ 科目内容

今日において様々な疾患があり、鍼灸治療に訪れる方々の病態や疾患も多岐にわたる。鍼灸治療の適応疾患は数多くある一方で、全てが適応というわけではなく、各種医療機関と連携をとりながら治療を進めていく必要がある。また、鍼灸師もチーム医療の担い手としてのニーズも高まってきており、他の医療従事者との共通認識、共通言語を持つことが求められる。

本講では現代医学の観点から各領域の代表的な疾患の概要を学ぶ。他の専門基礎分野科目の知識と関連づけながら、国家試験の対策のみならず、臨床に活かせる疾患の見方、考え方を身につけていく。

■ 到達目標

- ・各領域の代表的な疾患について、その概念、疫学、病態、症状、所見、治療、経過や予後を説明できるようにする
- ・現代医学の考え方を学び、鍼灸臨床のみならず、鍼灸師という医療人として他の医療関係者と対等に活躍できる力を身につける

■ 授業方法・教材

- ・教員が作成した資料、プリントを中心に授業を進める。
- ・「病気がみえる」各巻（医療情報科学研究所編、メディックメディア）： 教室にあり。

■ 学習方法

- ・教科書と教員が配布した資料をもとにして授業を進めていく
- ・解剖学や生理学の知識が本科目を理解するうえで必要になるため、予習・復習では解剖学や生理学の教科書と共に勉強することで、相互の理解がより深まる
- ・日常生活にアンテナを張り、ニュース等で出てくる病気や疾患について興味を持ち、その都度調べてみることで理解が深まる

■ 成績評価

- ・中間試験（50%）、期末試験（50%）

■ 授業計画

回	月 / 日	出欠	項 目
1			神経疾患
2			神経疾患
3			神経疾患
4			神経疾患
5			神経疾患
6			神経疾患
7			神経疾患
8			神経疾患
9			神経疾患
10			整形外科疾患
11			整形外科疾患
12			整形外科疾患
13			整形外科疾患
14			整形外科疾患
15			整形外科疾患
16			整形外科疾患
17			整形外科疾患
18			整形外科疾患
19			整形外科疾患
20			消化器疾患
21			消化器疾患
22			消化器疾患
23			消化器疾患
24			消化器疾患
25			消化器疾患
26			消化器疾患
27			消化器疾患
28			消化器疾患
29			消化器疾患

30			肝・胆・膵疾患
31			肝・胆・膵疾患
32			肝・胆・膵疾患
33			肝・胆・膵疾患
34			肝・胆・膵疾患
35			肝・胆・膵疾患
36			肝・胆・膵疾患
37			肝・胆・膵疾患
38			循環器疾患
39			循環器疾患
40			循環器疾患
41			循環器疾患
42			循環器疾患
43			循環器疾患
44			循環器疾患
45			循環器疾患
46			循環器疾患
47			循環器疾患
48			腎・泌尿器・生殖器疾患
49			腎・泌尿器・生殖器疾患
50			腎・泌尿器・生殖器疾患
51			腎・泌尿器・生殖器疾患
52			腎・泌尿器・生殖器疾患
53			呼吸器疾患
54			呼吸器疾患
55			呼吸器疾患
56			呼吸器疾患
57			呼吸器疾患
58			呼吸器疾患
59			呼吸器疾患
60			呼吸器疾患

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	はり・きゅう理論		担当教員	二本松 明	
開講時期	2年次通年		総時限数	30時限	授業形態	講義	単位数 4単位

■ 科目内容

患者さんに鍼や灸をするときに、①どこへ（圧痛点、硬結部位など）、②どのように（道具、刺激方法）を選択する必要がある。その際、それぞれの方法にどのような特徴があるかを知ることが効果的な治療を行うためにも重要である。また、鍼灸刺激が生体にどんな影響を及ぼすのか？、それはどのような仕組みによるものなのかを知っていなくてはならない。鍼灸理論は以上の内容を学習する教科である。

■ 到達目標

1. 治療法の決定に必要な治療法の特徴とそのメカニズムについて説明できる。
2. 鍼灸治療の際に用いる経絡・経穴の現代医学的解釈について説明できる。
3. 鍼灸治療効果に関わる基礎知識（神経・感覚生理学）について説明できる。
4. 鍼灸刺激による生体への影響（内臓機能の調節、鎮痛効果等）のメカニズムについて説明できる。

■ 授業方法・教材

- ・「はり・きゅう理論」：（社）東洋療法学校協会編、医歯薬出版株式会社
- ・サブテキスト「生理学」：（社）東洋療法学校協会編、医歯薬出版株式会社
- ・教員が作成したプリント

■ 学習方法

- ・解剖学、生理学、はりきゅう実技の知識が必須となるため、復習しておくこと

■ 成績評価

- ・中間試験（50%）、期末試験（50%）で評価する。

担当職員 二本松 明

資格 はり師・きゅう師

所属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター

経歴 新潟看護医療専門学校 東洋医療センター鍼灸治療院

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項目
1			感覚（触圧覚）の受容と伝導
2			感覚（温度感覚）の受容と伝導
3			感覚（深部感覚）の受容と伝導
4			感覚（痛覚）の受容と伝導
5			神経の伝導の仕組みと鍼刺激の効果の関係
6			ヒトにおける鍼灸刺激と自律神経反射のレビュー
7			神経生理学、感覚生理学復習
8			神経の伝導の仕組みと鍼刺激の効果の関係
9			脊髄レベルでの鎮痛機構（ゲート・コントロール理論）
10			鍼灸刺激による自律神経機能の調節（動物への薬理的手法による検討）
11			鍼灸刺激による循環改善のメカニズム
12			鍼刺激による鎮痛メカニズム その① 局所、脊髄、中枢神経
13			鍼刺激による鎮痛メカニズム その② 鍼麻酔のメカニズム
14			鍼刺激による鎮痛メカニズムのまとめ
15			中枢神経機構と鍼刺激
16			生理学内分泌系
17			生理学内分泌系
18			生理学内分泌系
19			刺激と反応、鍼灸の一般的治効理論、神経系－内分泌系－免疫系のつながりと鍼灸
20			生理学運動機能（筋機能）
21			生理学運動機能（筋機能）
22			生理学運動機能（運動神経反射）
23			生理学運動機能（運動神経反射）
24			運動神経系に対する鍼刺激の効果
25			神経疾患に対する鍼灸刺激の作用メカニズム
26			関連学説 その① フィードバック、ホメオスタシス
27			関連学説 その② ストレス学説
28			関連学説 その③ レイリー現象
29			関連学説 その④ 圧発汗反射
30			まとめ

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	東洋医学臨床論		担当教員	川浪 勝弘 八重樫 稔		
開講時期	2年次通年		総時限数	54時限	授業形態	講義	単位数	7単位

■ 科目内容

鍼灸臨床にとって必要な主要症候に対して、治療の適・不適を判断する。

疾患の特徴、治療方針、鍼灸治療の方法について学習し、東洋医学的視点と西洋医学的視点を総合した鍼灸治療を学習する。日常遭遇する頻度が高い症候・疾患の診察および鍼灸治療に必要な知識を修得する。国家試験に出題される可能性の高い疾患や症候について、基本的な事項を重点的に学習する。

日常生活における漢方的知識の理解と応用を図る。漢方医学の全体概念を把握する。

■ 到達目標

- ・ 臨床上遭遇しやすい疾患に対して、鑑別診断を行うことが出来る。
- ・ 疾患を把握し、疾患の特徴を説明することが出来る。
- ・ 国家試験に出題される疾患に対して、重要点を説明することが出来る。

■ 授業方法・教材

教員が作成する資料

■ 学習方法

各疾患の特徴を把握し、鑑別診断を行う。

教員が配布した資料をもとに授業を進めていく。

■ 成績評価

中間試験：50点 期末試験：50点

担当職員 川浪 勝弘

資 格 はり師・きゅう師

所 属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター

経 歴 札幌センチュリー病院

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			弁証の立て方
2			弁証の立て方
3			弁証の立て方
4			弁証の立て方
5			東洋医学的診断法
6			東洋医学的診断法
7			配穴法
8			配穴法
9			頭痛
10			頭痛
11			顔面痛
12			顔面痛
13			顔面神経麻痺
14			顔面神経麻痺
15			めまい
16			めまい
17			耳鳴り
18			耳鳴り
19			咳嗽
20			咳嗽
21			鼻閉・鼻汁
22			鼻閉・鼻汁
23			腹痛
24			腹痛
25			便秘と下痢
26			便秘と下痢
27			婦人科疾患
28			婦人科疾患
29			月経異常

30		月經異常
31		漢方医学
32		漢方医学
33		漢方医学
34		漢方医学
35		運動器疾患
36		運動器疾患
37		運動器疾患
38		運動器疾患
39		運動器疾患
40		運動器疾患
41		運動器疾患
42		運動器疾患
43		運動器疾患
44		運動器疾患
45		運動器疾患
46		運動器疾患
47		運動器疾患
48		運動器疾患
49		運動器疾患
50		運動器疾患
51		運動器疾患
52		運動器疾患
53		十二経脈、奇経八脈
54		十二経脈、奇経八脈

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	経絡経穴概論		担当教員	志田 貴広		
開講時期	2年次前期		総時限数	30時限	授業形態	講義	単位数	4単位

■ 科目内容

1年次に引き続き、経絡経穴に関する知識（奇経八脈、奇穴、経絡経穴の現代的研究など）を学修する。また、人体での取穴を中心とした臨床的な知識・技術の習得も行う。

■ 到達目標

1. 経絡経穴に関する知識を深め、資格取得に必要な知識レベルに到達する。
2. 経脈流注の関連を理解し、整合性のある取穴を手際よく正確に行うことができる。
3. 経穴の解剖学的な知識を理解し、体表部より触察することができる。

■ 授業方法・教材

教科書：「新版 経絡経穴概論 第2版」

1. 教科書やプリントを用い、座学と取穴の実技を並行して行う。
2. 知識の定着を促すため、定期的に小テストを行う。

■ 学習方法

取穴の実技では実際の鍼灸臨床を意識し、患者の個人差を想定した取穴や身体の部位別の取穴を学ぶ。そのため、自発的になるべく多くの人の身体で取穴を行い、経験を積むようにすること。また、取穴の際に経穴の部位や解剖学の知識が必要になるため、授業前に1年次の復習を行っておくことが望ましい。

■ 評価評価

取穴試験、期末試験により評価する。

その他、授業内で行う小テストの結果も加味する。

担当職員 志田 貴広

資格 はり師・きゅう師

所属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター

経歴 みらい鍼灸院

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項 目
1			オリエンテーション、第2章 経脈・経穴 奇経八脈
2			第2章 経脈・経穴 奇経八脈
3			第2章 経脈・経穴 奇経八脈
4			第2章 経脈・経穴 奇経八脈
5			第2章 経脈・経穴 奇穴
6			第2章 経脈・経穴 奇穴
7			第2章 経脈・経穴 奇穴
8			第2章 経脈・経穴 奇穴
9			第3章 経絡・経穴の現代的研究
10			第3章 経絡・経穴の現代的研究
11			上肢の経穴の特徴と取穴
12			上肢の経穴の特徴と取穴
13			上肢の経穴の特徴と取穴
14			上肢の経穴の特徴と取穴
15			上肢の経穴の特徴と取穴
16			上肢の経穴の特徴と取穴
17			下肢の経穴の特徴と取穴
18			下肢の経穴の特徴と取穴
19			下肢の経穴の特徴と取穴
20			下肢の経穴の特徴と取穴
21			下肢の経穴の特徴と取穴
22			下肢の経穴の特徴と取穴
23			上下肢の取穴テスト
24			上下肢の取穴テスト
25			上下肢の取穴テスト
26			上下肢の取穴テスト
27			経絡経穴を用いた治療法
28			経絡経穴を用いた治療法
29			経絡経穴を用いた治療法
30			経絡経穴を用いた治療法

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	生体観察		担当教員	阿部 吉則		
開講時期	2年次通年		総時限数	30時限	授業形態	講義	単位数	4単位

■ 科目内容

2年次科目である「臨床医学総論」の教科内容をもとに、基本的身体診察の実技を学習する。特に、神経学的検査の方法や関節可動域テスト、徒手筋力テストの意義を理解し、実際にモデルを利用して診察所見を得る過程を体験する。

■ 到達目標

1. 全身及び局所の診察方法の意義と方法を理解し、実際に行うことができる。
(血圧測定、脈拍測定、徒手筋力検査、関節可動域検査)
2. 神経系{知覚、筋力、反射(表在反射、深部反射、自律神経反射、病的反射など)}の診察方法の意義と方法を理解し、実際に行うことができる。
3. 特徴的な症状と疾患との結びつけができるようになる。
4. 脈診、腹診を行うことができる。
5. 整形外科的理学検査の意義を理解し、適切に行うことができる。

■ 授業方法・教材

- ・教科書 : 「臨床医学総論」(東洋療法学校協会編、医歯薬出版)
- ・その他 : 必要に応じて講義内容に関する資料を配付する。
ビデオ教材、模型を適宜使用する。

※本科目は実技科目であるが、教室を使用した座学を中心とする授業も行う。

■ 学習方法

本科目は2年次に学習する「臨床医学総論」、「臨床医学各論」、「東洋医学臨床論」、「人体機能学」の内容を踏まえ、その実技を行う科目です。常に各科目との関連を振り返るよう学習を進めてください。

■ 持ち物

背部や肩、膝を出したりするので、バスタオルや手ぬぐい等、ハーフパンツ
配布されたテキスト

■ 成績評価

- ・実技試験と期末試験、必要であれば中間試験の成績で評価する。

■ 授業計画

回	月 / 日	出欠	項 目
1			オリエンテーション、バイタルサイン
2			脈診・腹診
3、4			感覚検査
5、6			腱反射
7、8			実技試験
9・10			整形外科的理学検査 頸部・上肢
11・12			整形外科的理学検査 頸部・上肢
13・14			整形外科的理学検査 上肢
15・16			整形外科的理学検査 腰部・下肢
17・18			整形外科的理学検査 腰部・下肢
19・20			整形外科的理学検査 下肢
21・22			整形外科的理学検査 下肢
23・24			整形外科的理学検査 まとめ
25・26			徒手筋力検査
27・28			関節可動域検査
29・30			実技試験

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	臨床実習		担当教員	阿部	吉則	志田	貴広
開講時期	2年次通年		総時限数	46時限	授業形態	実技	単位数	2単位	

■ 科目内容

実際の鍼灸臨床の現場において、これまで学んできた座学および実技の知識・技術を確認し、2年次と3年次にわたって鍼灸師として必要とされる臨床能力を総合的に育成する。

2年次は、臨床実習前教育として主にコミュニケーション技法や医療面接、身体診察の基礎を学ぶほか、北海道鍼灸専門学校附属臨床センターにて見学実習に参加する。

3年次は、学校の附属臨床実習センターにおける外来診療に参加し、臨床実習指導者の指導の下、鍼灸施術ができることを目的とする。

■ 到達目標

1. 医療従事者として適切な服装や身だしなみ、挨拶ができる。
2. 患者に不快感を与えない言葉遣いや、行動ができる。
3. 医療面接を行うことができる。
4. 診療録（カルテ）を書くことができる。
5. 基本的な身体診察法を行うことができる。

■ 授業方法・教材

特定の教科書はないため、講義ごとに配布プリントやPCスライド、動画などを利用して学習する。

■ 学習方法

本科目は2年次に学習する「臨床医学総論」、「臨床医学各論」、「東洋医学臨床論」「人体機能学」「生体観察」の内容を踏まえ、その実技を行う科目です。常に各科目との関連を振り返るよう学習を進めてください。

■ 評価基準

実技試験、レポート提出等の状況を踏まえて総合的に評価する。

■ 連絡事項

実技試験が不合格の場合、春休みを利用して補講を行い、適宜追試験を行う。

担当職員 阿部 吉則

資格 はり師・きゅう師 あん摩マッサージ指圧師

所属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター

経歴 ユリ治療室

担当職員 志田 貴広
 資格 はり師・きゅう師
 所属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター
 経歴 みらい鍼灸院

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項目
1・2			オリエンテーション
3・4			見学実習
5・6			見学実習
7・8			見学実習
9・10			見学実習
11・12			見学実習
13・14			見学実習
15・16			医療面接の概要
17・18			医療面接の概要
19・20			医療面接の概要
21・22			医療面接の概要
23・24			骨性指標と筋・経穴の触診 ヤコビー線（腰部） 背候診 大腸俞、腎俞
25・26			骨性指標と筋・経穴の触診 大転子・仙骨 背候診 脾俞、肝俞
27・28			骨性指標と筋・経穴の触診 肩甲骨 背候診 膈俞、心俞、肺俞
29・30			骨性指標と筋・経穴の触診 大後頭隆起 天柱、風池、完骨
31・32			骨性指標と筋・経穴の触診 肩峰、結節間溝、烏口突起
33・34			身体診察法
35・36			身体診察法
37・38			身体診察法
39・40			鍼灸実技
41・42			鍼灸実技
43・44			実技試験
45・46			実技試験

オリエンテーションは見学実習前に行う。

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	はり・きゅう実技		担当教員	川浪 勝弘 煤賀 有美
開講時期	2年次通年	総時限数	76時限	授業形態	実技	単位数 5単位

■ 科目内容

日常疾患で遭遇しやすい運動器疾患の診察方法・治療方針について、現代医学的なアプローチを系統的に疾患別に学習する。

産婦人科領域、小児はり、美容鍼について治療技術を修得する。

■ 到達目標

- ・ 疾患別に診察・治療方針を立て、治療することが出来る。
- ・ 身体各部の刺激方法および経穴に対して、正しく刺鍼法を修得することが出来る。
- ・ 施灸用具とその取扱い、種々の灸療法、治療点に対して正しく施灸することが出来る。

■ 授業方法・教材

教員が作成する資料

■ 学習方法

教員がデモンストレーションを行い、その後にペアに分かれて刺鍼・施灸を行う。

■ 評価基準

- ・ 実技試験：60点以上（前期中間実技試験、前期期末実技試験、後期期末実技試験）
- ・ 出席率：80%以上

担当職員 川浪 勝弘

資格 はり師・きゅう師

所属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター

経歴 札幌センチュリー病院

担当職員 煤賀 有美

資格 はり師・きゅう師、看護師

所属 北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター

経歴 SSCビューティークリニック

■ 授業計画

回	月 / 日	出欠	項 目
1			基本的な刺鍼手技・施灸手技
2			基本的な刺鍼手技・施灸手技
3			基本的な刺鍼手技・施灸手技
4			基本的な刺鍼手技・施灸手技
5			肩こり
6			肩こり
7			肩こり
8			肩こり
9			肩こり
10			肩こり
11			肩関節
12			肩関節
13			肩関節
14			肩関節
15			肩関節総括
16			胸郭出口症候群
17			胸郭出口症候群
18			胸郭出口症候群
19			胸郭出口症候群
20			胸郭出口症候群に対する総括
21			肘関節（外側上顆炎・内側上顆炎）
22			手関節
23			手関節
24			肘・手関節に対する総括
25			上肢 要穴部位の確認
26			上肢 要穴部位の総括
27			上肢 要穴部位の確認
28			腰背部
29			腰背部

30			腰背部
31			腰背部総括
32			下肢神経痛
33			下肢神経痛
34			下肢神経痛
35			下肢神経痛総括
36			股関節
37			股関節
38			股関節疾患に対しての総括
39			膝関節
40			膝関節
41			膝関節に対しての総括
42			足関節
43			足関節
44			下肢 要穴部位の確認
45			下肢 要穴部位の確認
46			下肢 要穴部位の総括
47			冷え・むくみ
48			冷え・むくみ
49			月経不順
50			月経不順
51			月経不順
52			月経不順
53			不妊
54			不妊
55			不妊
56			不妊
57			妊娠中
58			妊娠中
59			産後
60			産後

61			更年期
62			更年期
63			更年期
64			更年期
65			ダイエット
66			ダイエット
67			ダイエット
68			ダイエット
69			美容鍼
70			美容鍼
71			美容鍼
72			美容鍼
73			小児はり
74			小児はり
75			お灸
76			お灸